

それは奇跡ではなく

～55人の野球部員たちへ～ (1)

ブラームスのチェロソナタが流れている。今日は、野球部の活躍を思い返しながらか、心が緩やかに揺さぶられるような気分で聴いている。

20日に行われた秋田工業戦、7回裏で6対0となり、3塁ランナーがホームを踏めば本荘のコールド負けという場面をどうにか切り抜けて、9回表に6点差を追っての本高の攻撃となった。本高は2回表の満塁のチャンスを生かすことが出来ず、それ以降は相手に押され、チャンスを作れずに、いよいよ6点を追っての最後の攻撃か、と思われた。せめて何点でも返して、意地を見せてもらいたいと誰もが願っていたらう。

野球部が誰よりもひたむきに、地道に練習に取り組んできたことをみんな知っている。他のどの部活動よりも厳しく、苦しい練習を積み重ねてきたことを知っている。校標である右文尚武を実現すべく、懸命な努力を続けたことを知っている。(時々には失敗もしたにしても。) 甲子園という夢の舞台を目指し、からだじゅうに元気と闘志を漲らせ、野球部自体が大きな熱風のように学校の中を吹き抜けた。



圧倒的に押されていても、スタンドで声をからして声援し続けた控えの選手たちがいる。2年生の男子生徒は仲間と肩を組み、何度も何度も上体を反らしながら必勝歌を繰り返した。みんなでもっと声をだそうよ、女子生徒の声はひととき大きくグラウンドに響いた。応援団も吹奏楽部も、炎天に焼かれながら汗だくで懸命に応援をした。いつも見守ってくれている保護者の姿もあった。

どんなゲーム展開であっても諦めない限りは逆転のチャンスがあるのだ、諦めたところでゲームは終わってしまうのだ。最後まで勝利を信じて闘ってほしい、と祈るように願っていた。

まるで、彼らはそのことを実現しようとしているかのように思われて、胸が熱くなった。諦めない限り、逆転のチャンスはある。土壇場になっても誰一人諦めず、勝利への雄叫びをあげ、猛然と反撃にでた。9回表1アウトから満塁となり、キャプテン三船選手、三浦選手、土田選手等の連打で6点を奪い取り、彼らは奇跡をたぐり寄せた。

延長10回裏に相手チームが満塁となった。3人目の畠山投手の投じたボールが打ち返されて、センター佐々木選手が飛びついたその先にぼとりと落下した瞬間は、まるで時間が止まってしまったように思われた。選手たちの頬を涙が伝い、仲間に肩を支えられてすすり泣く姿があった。控えの選手たちの顔も涙と汗でぐしょぐしょだ。(裏に続く)

それは奇跡ではなく

～55人の野球部員たちへ～ (2)

奇跡をたぐり寄せた、と書いた。しかし、あの反撃のドラマは、決して奇跡などではなかったのだと思う。

誰一人として試合を諦めていなかったこと、誰一人意気消沈していなかったこと、誰一人勝利への執念を失わなかったこと。選手たちはもちろん、控えの選手も心一つにして、本高の野球を信じ、仲間を信じ、監督の指導を信じ、そして、自分の力を信じて勇敢に立ち向かったこと。本高生の祈るような応援を、しっかりと受け止めて力に変えたこと。

9回表の追撃のドラマは、奇跡などではなく、野球部がこれまでに鍛え、蓄積してきた軌跡そのものなのだ。これまでの鍛錬の軌跡がまっすぐにあの9回表につながっている。

55人の野球部員に、私たちは教えられた。闘うということの厳しさと重たさ。闘いに挑む眼差しの強さと覚悟の深さ。どんなに苦しい闘いでも逃げずに、敢然と、猛然と反撃を開始する精神の強靭さ。

55人の野球部員は、勇者のようにひるまずに挑んだ。さあ、後輩たちよ、闘うというのはこういうことなのだ。我々の姿を覚えておいてほしい。苦しいときには、9回表の猛反撃の姿を思い出せ。

私たちは55人の野球部員たちのけなげなる勇姿を忘れない。君たちの投じたボールは、スタンドで応援していた一人一人、そして本高生徒一人一人の心のミットにしっかりと受け止められた。君たちの打った打球はぐんぐんと伸びていき、一人一人の心の青空に吸い込まれていった。私たちは君たちの姿を忘れない。君たちが闘った姿は、本高生一人一人の心に焼き付いて、困難に立ち向かう勇気を与えてくれるだろう。

そう、闘うというのはそういうことなのだ。

55人の野球部員たちと、その姿を焼き付けた本高生一人一人のこれからの闘いを大いに楽しみにしている。